山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第９集

K-809

高　楯　城　跡

発掘調査報告書

2000

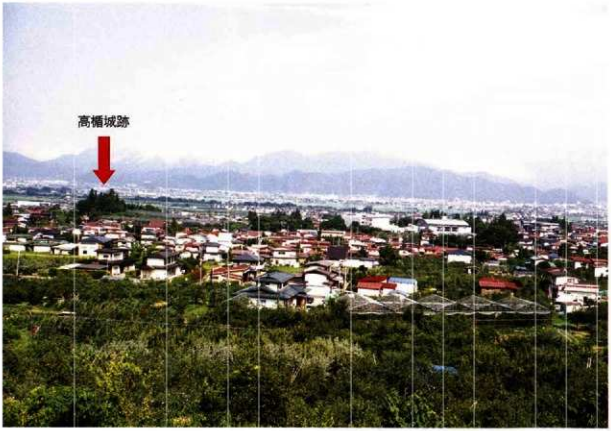
山辺町教育委員会

高楯城跡

発掘調査報告書

２０００年３月

山辺町教育委員会



諏訪原地区からみた高橋城周辺

出土した青磁

出土した唐津焼

出土した砥石

序　文

この報告書は、山辺町大字山辺字北町に所在する中世城館跡である「高楯城跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

山辺町内の城館跡としては、山野辺義忠の山野辺城や、東の関ケ原とも呼ばれ、慶長５年（1600）の出羽合戦のさいに激しい戦闘が繰り広げられた畑谷城などが知られております。

当町の山間部は、中世から近世初頭にかけて、最上氏・伊達氏（上杉氏）・大江氏などの境界領域にあたることから、争いに備えて築かれた館跡が点在することでも知られています。

高楯城は出羽（白鷹）丘陵を間近に仰ぎ、寒河江・山形方面を見渡すことができる小丘陵地を利用して立地する平山城です。

近くの寺に残る了広寺文書では、宝徳元年（1449）に甲斐国（現在の山梨県）から出羽国（現在の山形県と秋田県）の山形に移った武田信安が、山形城主最上満家により高楯邑に荘園地を与えられ、墓（とりで）を築いたとあります。

また、現在に残る高楯城を築いた高楯城主「高楯遠江守」の名前は多くの文献にみられ、最上家宗家に対する忠臣として知られています。最上氏改易後は、最上家宗家とともに近江国大森に赴いて、代々家老職を勤めたようです。

この度、高楯城の主郭に続く南側の郭南部一帯の宅地造成、主郭西部に建設される生涯学習施設の建設工事に先だって発掘調査を行いました。

その結果、見事な堀跡、住居跡や井戸跡が検出され、中世から近世にかけての山辺町の歴史の一端が確認されました。

発掘調査にあたっては、茨木光裕氏をはじめ調査にご協力いただいた方々、並びに開発日程を変更してまでご支援をしていただいた関係各位にたいしまして、厚く感謝もうしあげます。

平成12年３月

山辺町教育委員会
教育長　高橋達雄

例　言

1　本書は平成10年度及び平成11年度に実施した、開発にかかる「高幡城跡遺跡」の発掘調査報告書である。
2　調査は、山辺町教育委員会が主体となり実施した。
3　調査要項は以下の通りである。
遺跡名　高幡城跡遺跡
所在地　A地点　平成10年度　山辺町大字山辺字北町935・936・937・938-1
B地点　平成11年度　山辺町大字山辺字北町975
調査主体　山辺町教育委員会
調査期間　A地点　平成10年度　平成10年6月8日～7月15日
B地点　平成11年度　平成11年6月25日～7月10日
調査総括　A地点　平成10年度　蜂谷四郎（教育長）
B地点　平成11年度　渡辺秀彦（教育長職務代理者）
調査指導　茨木　光裕（日本考古学協会会員）
調査担当　三浦　浩人（山辺町教育委員会）
調査員　高橋　玄寿　後藤　禮三　佐藤　継雄　村山　賢司
調査参加者　（現地）加藤美智子　垂石　よし　山寺　惟友　松田美智雄
多田　均　伊藤　重雄　伊藤　豊　三浦　千代
（整理）武田　美和　長谷川直美
事務局長　渡辺　秀彦
事務局　渡辺　直好（平成10年度）　長谷川吉則（平成11年度）　武田　一志
笠原　文　安孫子正治
4　出土遺物・調査記録類については、山辺町教育委員会に一括保管している。
5　本書の作成・執筆及び編集は三浦浩人が担当した。
6　発掘調査にあたっては、株式会社太平堂不動産及び株式会社武田組、株式会社平吹設計事務所、株式会社藤建設、など多くの関係各位より協力を得た。記して感謝もうしあげます。
7　発掘調査及び本書を作成するにあたっては、阿部明彦氏（山形県立博物館）、高桑登氏（財・山形県埋蔵文化財センター）など多くの方々からご教示・ご指導をいただいた。深く感謝いたします。
8　本遺跡の地理的・地質的な考察をしていただくため、大場總氏（山形県立博物館）の玉稿を賜った。深く感謝する次第です。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類番号は、次ぎの通りである。
ＳＢ－掘立柱建物跡　ＳＥ－井戸跡　ＳＤ－溝跡・堀跡　ＳＫ－土　壙
ＳＸ－性格不明遺構　ＳＰ－ピット・柱穴　ＲＰ－土器・陶磁器
ＲＷ－木製品　ＲＳ－石製品
2　遺構番号は、分類記号をつけた通し番号とした。
3　本報告書執筆の基準は下記のとおりである。
（1）実測図中の方位は磁北をしめしている。
（2）A地点のグリッド南北線は、Ｎ－31°－Ｅを測る。
（3）遺構実測図は、1/10・1/20・1/250・1/500の縮尺で採録し、それぞれにスケールをつけた。
（4）遺物実測図は、1/1・1/5の縮尺で採録し、それぞれにスケールをつけた。

目　次

第1章
Ⅰ　調査の経緯と方法 …… 1
1　調査にいたる経過 …… 1
2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
1　地理的環境 …… 2
2　歴史的環境 …… 3
3　付近の遺跡の概要 …… 5
4　土層の基本的層序 …… 5
Ⅲ　調査の成果 …… 7
1　A地点の遺構 …… 7
2　B地点の遺構 …… 20
3　出土遺物 …… 23
Ⅳ　まとめと考察 …… 24
1　本城郭の様相と性格 …… 24
2　まとめ …… 25
第2章
山辺付近の地形的・地質的特徴について
－特に『高幡』付近について－ …… 40

表

出土遺物観察表 …… 36

挿図目次

図1　調査地点位置図 …… 2
図2　高幡城復元略図 …… 4
図3　高幡城略測図 …… 4
図4　高幡城とその周辺の遺跡 …… 5
図5　A地点調査区設定図 …… 6
図6　Aトレンチ平面図・断面図 …… 8
図7　A区C区平面図 …… 9
図8　Bトレンチ平面図・断面図 …… 10
図9　C区建物跡及びSD10堀跡実測図 …… 12
図10　D区平面図・断面図 …… 13
図11　E区平面図・断面図 …… 15
図12　E区SE1井戸跡実測図 …… 16
図13　Fトレンチ平面図・断面図 …… 18
図14　B地点調査区設定図 …… 19
図15　Iトレンチ平面図・断面図 …… 20
図16　Jトレンチ平面図・断面図 …… 21
図17　Kトレンチ平面図・断面図 …… 22
図18　出土土器陶磁器（1） …… 26
図19　出土土器陶磁器（2） …… 27
図20　出土土器陶磁器（3） …… 28
図21　出土土器陶磁器（4） …… 29
図22　出土土器陶磁器（5） …… 30
図23　出土土器陶磁器（6） …… 31
図24　出土土器陶磁器（7）出土石製品 …… 32
図25　出土木製品（1） …… 33
図26　出土木製品（2） …… 34
図27　出土木製品（3） …… 35
図28　高幡城縄張図 …… 39

図　版

巻頭図版1　諏訪原地区からみた高幡城周辺
巻頭図版2　出土した青磁・唐津焼・砥石
図版　1　小学生を集めての現地説明会風景・発掘調査風景 …… 43
図版　2　E区SE1井戸跡・C区SD11溝跡 …… 44
図版　3　A区SD10堀跡・A区SD8堀跡 …… 45
図版　4　Eトレンチ SD8堀跡状況・C区SD9水路遺構・Fトレンチ土層断面
C区SD10薬研堀状況 …… 46
図版　5　出土遺物（1） …… 47
図版　6　出土遺物（2） …… 48

第1章

Ⅰ　調査の経緯と方法

1　調査にいたる経過

高幡城は周知の遺跡であり、南側に隣接する山野辺城とともに、町民に身近な城跡である。この地域に2つの開発計画が持ちあがった。

ひとつは、株式会社太平堂不動産による、高幡城の主郭の南側の郭部分の直下の平坦地（以下A地点という。）に宅地を造成することである。

もうひとつは、高幡城主郭の中心施設となる現在の天満神社直下西側にある、安達峰一郎博士の偉業をしのぶためにつくられた記念保育所を別の場所に移築し、安達博士の生家が元々あった保育所の跡地に生家を移し、さらに、生家のあった場所（以下B地点という。）に公民館（山辺町生涯学習施設）を建築することになったのである。

このため、A地点では平成10年5月7日と8日の両日に付近の分布調査を実施した。

トレンチ1箇所とテストピット6箇所を設定した。B地点については11年度に試掘調査をすることとした。

A地点での試掘調査の結果、高幡城の堀跡と思われる遺構を確認し、関係者と協議し、6月8日より発掘調査を実施した。

また、B地点では、平成10年度12月の現場踏査を含む打ち合わせで、開発により破壊される道路部分のみ発掘調査を行うこととした。

このように短期間に、同一の区域で発掘調査が実施されることから、関係者が協議して調査報告書を1冊にまとめて発刊することとした。

2　調査の方法と経過

A地点の調査は、はじめに縦横とも10m網目の、グリッドを設定したのち、当初はトレンチを数本設定し、堀の形体を確認することとしていた。しかし、堀の南側からピット状の落ち込みや土壙が多く確認され、その結果、可能なかぎり調査面を広げて堀跡とその南側の平坦地の形体を確認するようにつとめた。そのためAトレンチ、Bトレンチ……というふうに調査区を当初設定していたが、部分的にグリッドで調査する方法を実施している。

この結果、調査区により区とグリッドの名称を使い分けている。また、調査区が続いている部分もあるが、遺構により便宜上、調査区名を使い分けている。

B地点では、堀の状況を確認することを目的として、トレンチによる調査のみを実施する予定とし、その通り実施した。調査時点では北側よりAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチとしたが、今回まとめるにあたってA地点との混同を避けるため、それぞれIトレンチ、Jトレンチ、Kトレンチとあらためた名称を使用している。

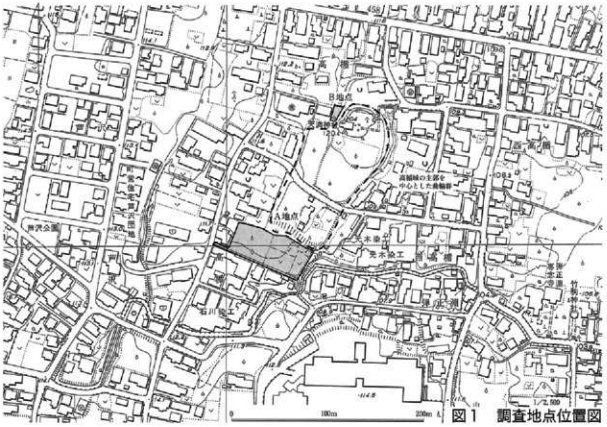


図1　調査地点位置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

山辺町は山形盆地の南西部に位置し、その盆地の西側を北流する須川より西は古くより「川西」といい表されてきた（白川より西として使用する場合も多い）。山辺町のうち旧山辺町はその「川西」地域の中心的な集落の一つとして発展してきた。旧山辺町、大寺村、相模村を中心とした町の中心である東部は狭い。西から東にかけては、中小の河川により形成された小扇状地と須川が形成する段丘と氾濫原、そして自然堤防へと移る。西部は出羽丘陵（白鷹丘陵）となり、山懐が深い。しかし、急峻な山岳は比較的少なく、穏やかな山里の風景を呈している（地形・地質については第２章を参照）。

高楯城は旧山辺町では北西にあたり、その主郭は標高120mに立地しており、台地状の地形を利用して城館を築いている。

A地点は、山辺町大字山辺字北町に位置し、東側は深い谷（境ノ目川）となり、西側は町道西町高楯線、南側は小道で水道橋（水晶橋）といわれる橋を通り山野辺城三ノ丸の殪正測という集落に至る。北は一段高くなっており、もとの高楯城の郭の南端となるが、現在は宅地となっている。A地点の現況は畑である。開発予定地である2,590m²のうち800m²の範囲を対象に緊急発掘調査を実施した。

B地点は、宅地、畑及び原野となっているが、調査区を限定し、主郭直下の堀跡を追いかけることを中心にして131m²を調査した。

2　歴史的環境

山辺町の基となる山辺地区の中心部は、旧役場及び山辺小学校周辺である。ここは山野辺城跡で関ケ原の合戦後、元和８年の最上家改易まで、最上義光の四男山野辺光茂（義忠）が城主として治めた場所である。この山野辺城の北方にあたる、直線距離にして400から500mしか離れていない場所に高楯城は立地している。高楯城は最上氏と姻戚関係にある高楯遠江守が治めていた城である。

現在の山辺町城は、中世末から近世初頭にかけて、山間部を中心として境目の城館が多く存在していた。南部には伊達氏若しくは上杉氏、北部は大江氏、そして東部は最上氏が覇を唱えていた

ここで、高楯城に関連する史料を６例ほど紹介する。

一つ目は、玉虫沼にある石碑（寛政４年・1792）に刻まれている中に「玉虫の神池（玉虫沼）は応永年間（1394～1428）高楯の城主武田惣内安信、地を末良村（バッキョウ）（現在の朝日町宮宿内）に替て、山野辺九ヶ村用水となせり」とある。二つ目は、大正８年に出された『東村山郡史』に採録された了広寺の史料による。「本西法師、俗姓武田次郎信安ト称シ（略）甲府城主武田伊豆守信昌ノ次男ニシテ（略）永亨乙卯（1435）年誕生、宝徳元己巳（1449）年十五ニシテ羽州山形ニ赴ク、城主最上左京大夫満家、外戚ノ好ミヲ以ッテ、河西ノ領地ヲ分與シ高楯ニ居ラシム（略）信安遊猟野水ノ湛々タルヲ見ル、此地八沼城主岸美作守ノ領ナリシヲ以テ、替ルニ馬吉良村ヲ持テス（略）周圍一里有餘ノ大沼ヲ修築シ」とある。三つ目は、二と同じ史料で、「（了広寺）当時開基本西。俗称（略）武田信昌伊豆守次男、武田次郎信安（略）永亨七乙卯（1435）年誕、宝徳元己巳（1449）年（略）山形城主最上左京大夫満家以_外戚之好_託、因_之号武田惣内信安、満家於_羽州村山郡高楯邑_與荘圍地、後為_遠江守_墨総_近邑_」となっている。

四つ目は、天童市高擶の願行寺に残っている『願正御坊縁起』による。「其コロ山野辺北目北山ノ地頭高楯遠江守トテ端城ノ主ニ公儀へ密スル息女アリ。（中略）山野辺了光寺先祖俗名武田内蔵助（法名本西）気性強勢ニテ端武者ノ働キ数度有ノ覚者也。コノ故ニ遠州近習ニ親ク召遣フトイヘリ。（中略）〈武田内蔵助は〉法躰シ本西ト名乗ル」とある。了広寺文書との相違がみられる。

五つ目は、昭和16年の『山形県内に於ける古城跡の研究』で、地元の郷土史家武田泰造氏が執筆したところによれば、「高楯城は2500石を領する高楯遠江守正福の完成せる所である、（中略）高楯城は山野辺城の北方一沢を隔てた所に在る小城郭で、文献の徴すべきものは何物も存していない。ただ、堀の形跡が僅かに遺存している（中略）この城郭は高楯丘陵地を利用して築城した平山城で二重、東方は三重の堀を廻らして（中略）信安は葦名戦役に最上政家と出陣して失脚し、文明４年（1472）一族と共に鬼ノ目に隠棲した。これが鬼ノ目武田氏の起源である。（中略）武田信安の失脚後山野辺刑部が川西を領し山野辺城に居た。（中略）刑部は永正11年長谷堂の合戦に於いて戦死した（中略）関ケ原の役（1600）には（中略）日野備中守が山野辺城に居城して居た時高楯城には、同じく最上義光から封ぜられて高楯正福

が2500石を領していた。当時山野辺には二城対立の姿をなし現高楯城の郭の遺構はこの正福の築造に成るものである。然るに慶長6年最上義光の第四子山野辺義忠が楯岡から（中略）領主として山野辺に移封された。茲に於いて山野辺義忠と高楯正福の対立となったのである。（中略）元和7年（ママ）最上家の断絶と共に地を没収されて（以下省略）」とある。

六つ目は、新庄藩戸沢氏の『家林合集記』に、文明3（1471）年か寛正元（1460）年、将軍足利氏の命を受け、最上氏が動員した豪族の中に高楯九郎の名がある。

また、『山形市史史料編1』最上家関係史料をみると、最上義光分限帳には「高舘　一、高弐千五百石　最上家江罷在候　高舘遠江」、最上源五郎様御時代御家中并寺社方在町分限帳には「一、三百拾石　当時最上家御家老太郎左衛門是なり　高楯善五郎」、天明七年未年六月に写した最上家中分限帳のは、「一、弐千五百石　高館城　高舘遠江守」といった名前が見える。

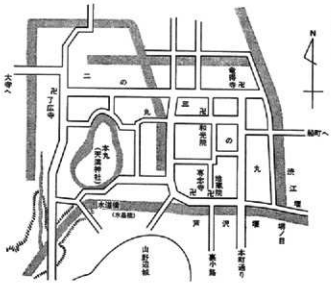


図2　高楯城復原略図
『山辺町郷土概史』武田泰造氏著（1970）

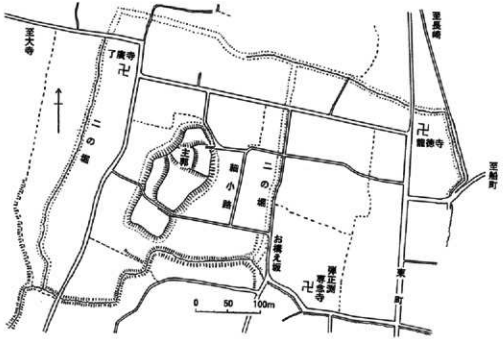


図3　高楯城略測図
『山形県中世城館跡調査報告書第2集』後藤禮三氏執筆部分（1996）

3　付近の遺跡の概要

山辺町内の遺跡は旧石器時代のものは確認されていないが、縄文（中期・晩期を中心として）弥生（後期）、古墳、奈良平安と時代ごとの遺跡が散在している（図４参考）。特に、日本海側の最北限の前方後円墳である坊主窪１号墳と、前期の古墳で日本海側最北限の埴輪を樹立する大塚天神古墳は特筆に価するだろう。

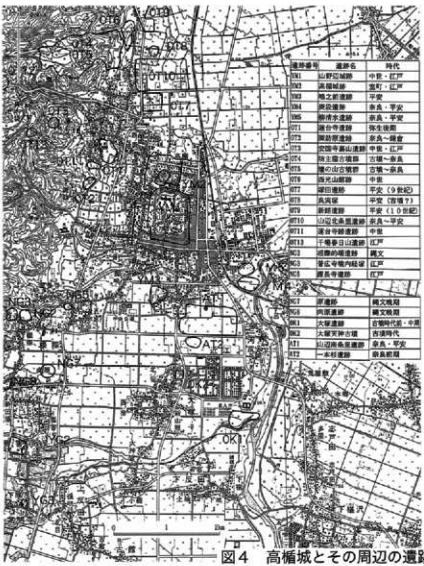


図４　高幡城とその周辺の遺跡

4　土層の基本的層序

高幡城の周り、特に南側を中心として、灰白色・凝灰岩（2.5Y8/2）に明黄色褐色（10YR6/6）の色が混じる地山がみられる。この場合は表土から浅いところで10cm弱、深いところで40cm程度の表土下から現れる。堀跡の部分では最低でも５層程度が確認できる。

標準的な層序としては、表土のすぐ下のⅠは暗黒褐色細砂層（小さな礫をふくむ）、Ⅱはにぶい黄褐色礫層（10YR5/4）、Ⅲは黒茶褐色粘土層（小礫を含む）、Ⅳは暗黄褐色粘土層、Ⅴは黒褐色粘土層ということになる。

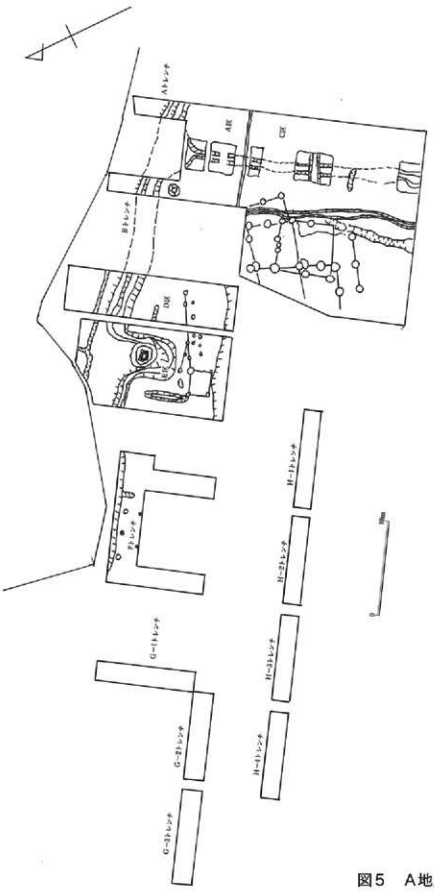


図5　A地点調査区設定図

Ⅲ　調査の成果

1　A地点の遺構

（1）Aトレンチ・A区

前述した通り、調査面積と開発時期の関係もあり、全面の表土を剥くことをせず、トレンチを基本として調査を実施している。便宜上、もっとも東部の堀跡に設定したトレンチとその南側周辺を、それぞれAトレンチ及びA区としている。その西に設定した堀跡周辺をBトレンチとした。さらにA区に接続して南側に拡張した調査区をC区としている。また、Bトレンチの西側の堀跡を中心としたところをD区、その西側をE区とした。

E区西側の「コ」の字型に設定したところはFトレンチ、それ以西のトレンチは東側からG－1トレンチ、G－2トレンチ、G－3トレンチとした。南側の道路に近い地点は東から西にH－1トレンチ、H－2トレンチ、H－3トレンチ、H－4トレンチとした。

以下、その調査区ごとの概要を述べてみる。

Aトレンチは堀の形状を中心とした。SD8と名づけた堀の落ち込みのはじまりから堀底までは、2m10cmを計る。一番深いところで深さ80cmとなる。堀底に至るまでには若干の平場があり、南側の堀の落ち込みは二段となっている。反対がわの堀の立ち上りは水路などで厳密には確定できないが、推定で堀底6m、堀の上面で8m30cmとなる箱堀である。また、土層の断面から水性堆積が確認できないことから、水を溜めない空堀であると推定される。現在、Aトレンチの東側には、東西方向の水を集めて、下の沢に流す施設があるが、城が存在した時代、堀の土手をいくら強化しても、標高的に低い地点にあるAトレンチ東側では水圧により決壊してしまうと思われる。Aトレンチ東側には竪堀の様相をしめす形状もあり、空堀であることは確かであると思われる。

A区では土色の変化により地山を検出することに努めた結果、幅2m深さ1m60cmの薬研堀（V字形）の堀SD10を確認した。この堀は郭の周囲にめぐる堀SD8に接続すると推定される。土層を確認すると一気に土を埋めたような、異なった土色土質を呈しており、城の破却の際の処置である可能性が考えられる。また、A区からC区の東側は断崖絶壁となっているが、その落ち際1mから2m前後は、他の地点と違って凹凸の少ない地山となっている。一仮説として、東側の崖面にはもともと小規模な土塁状の施設があり、後世に削平されたということが考えられる。

なお、前述の薬研堀が埋められてからのものであるが、その上面に溝状の掘り込みSD12が確認できる。

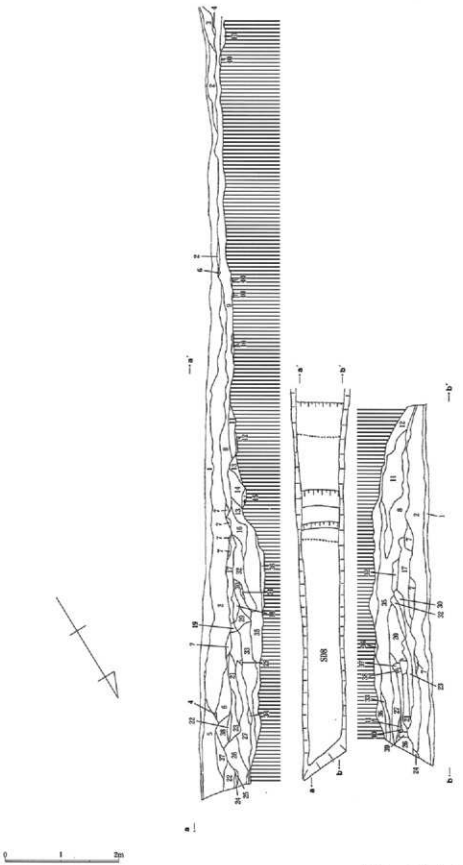


図6　Aトレンチ平面図・断面図

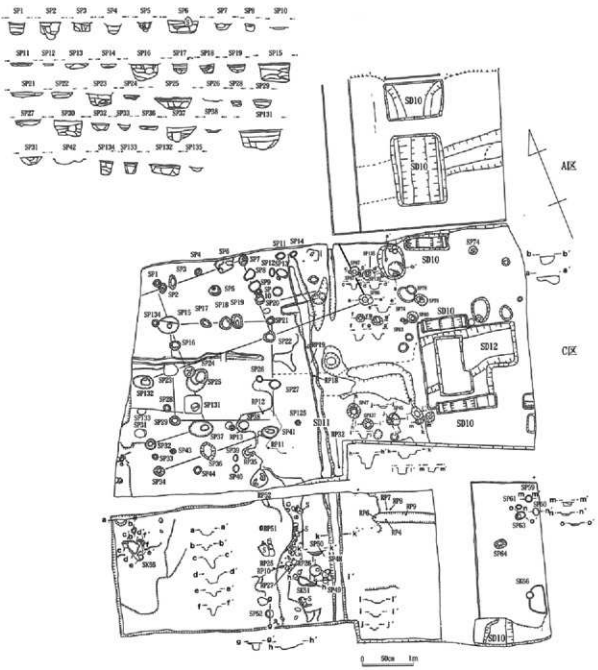


図7　A区C区平面図

（2）Bトレンチ

BトレンチもAトレンチ同様、SD8堀跡の状況を確認することを目的として実施した。これもAトレンチと同様に堀の落ち込みのはじまりから、堀底にいたるまでに若干の平場があり二段状になっている。北側の堀の立ち上がりは確認できないが、推定で、堀底４m50cm、堀上面で５m30cmを数える。さらにこの堀の落ち込みの始まる１m60cmほど手前の土壙SK89とSK90、SK88からは、古墳時代の土師器が底面より石に混じってまとまって出土した。

Aトレンチと同様に南側のみの調査となるが、堀の形態は箱堀である。

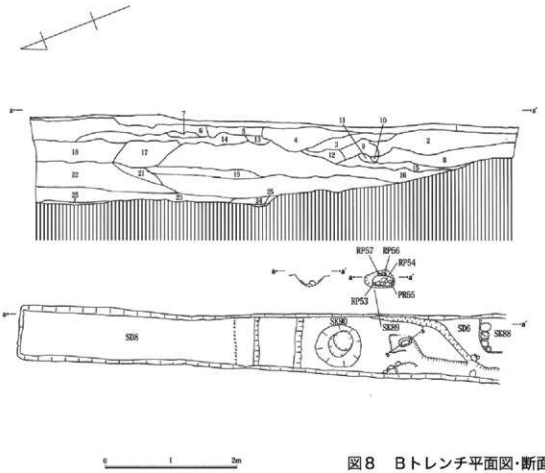


図８　Bトレンチ平面図・断面図

（3）C区

C区は予定よりかなり拡張した区域で、多くの土壙と柱穴が検出された。溝跡SD11が南北にわたり、さらに比較的浅い溝跡SD12が東西にかけてみられる。この地山からの遺物は近世から近代のもののみであるが、例外は、土壙や柱穴から古墳時代の土師器が出土する場合もあることである。

また、調査区南部では深くない溝跡に礫を多く含んだ水路状の遺構SD9を確認した。付近では配石や凹凸を持つ地形が確認できる。この地点は近世に住宅があったことが、江戸後期に書かれた高橋村の絵図に書かれていることから推定される。そのためSD9などの遺構は住宅に付随する庭園遺構である可能性が考えられる。

掘立柱建物については3棟ほどが確認できる。はじめに主軸がN－25°－EであるSB1が建ち、その次にSB2、ついでSB3が建てられたと思われる。

SB1は1間が1m90cmとなっている。SB2とSB3はN－3°－Eで共通しており、あるいは同一の建物である可能性もあるが、現時点では別の建物である見解に基づき記述する。

SB2は1間1m80cmである。東側にも同じ角度のピットSP86・87があることから梁間1間×桁行2間の建物であったと推定される。SB3は2面若しくは3面（SP18・41を含める場合）に庇を持つか、あるいは塀などの施設が建物のまわりを廻っていたと推定される。またSB3は西側に延びるものと思われる。

柱を据え付ける際の根石が多くのピットで検出された。ほとんどが10cmを越える礫を使用している。柱穴の掘り方はほとんどが円形か、不整円形を呈している。また、柱穴のアタリが明瞭に確認できるものも多かった。

A区の際に述べたが、堀跡SD10が南北に存在する。これは、近世に住宅が建築される前、例えば城の破却などの際に一挙に埋められたものと推定する。a－a´で幅2m深さ1m60cm、b－b´で幅1m80cm深さ1m50cm、c－c´で幅1m40cm深さ70cmとなる。極端な薬研堀で、高楯城に対しては、竪堀ということになる。

SD10は土層上から水を湛えていたとは考えにくい。北側にのびて、郭のまわりの堀SD8にT字型に合流する形となる。人一人歩くのがやっとといった幅となっている。

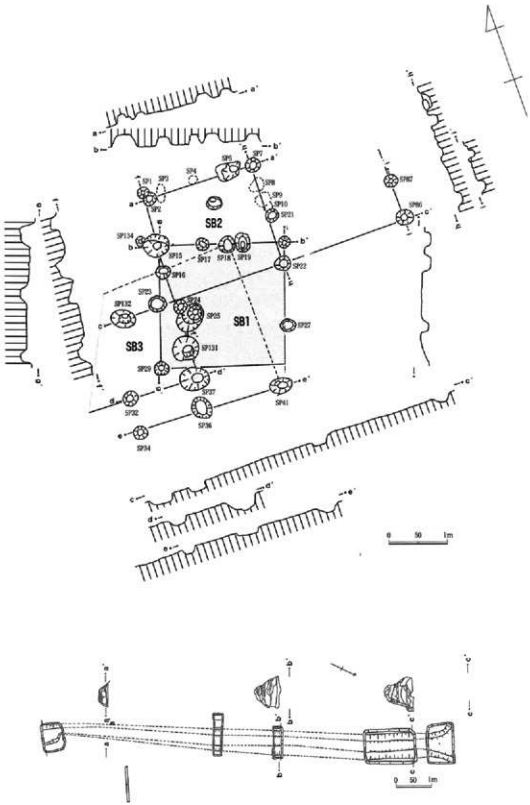


図9　C区建物跡及びSD10掘跡実測図

（4）D区

この調査区は８m50cm×１m50cmの調査区である。この地点からは遺物として青磁が出土している。基本的には堀跡SD8とその南側の立ち上がり部分を中心として調査を行っている。

とくに堀の南手前のピットをE区と合わせてたどると直線的につながり、塀や垣などの施設があったことが推定される。堀については、A・Bトレンチと同様に２段の堀へ移行する傾斜をもつ遺構であるが、その堀の落ち込みライン50cm先にあたる部分の底には溝状の遺構SD1がE区まで続いていることが確認できる。この事は堀底になんらかの施設があったことを示している。堀の片側だけの調査であるが、形状は箱堀である。

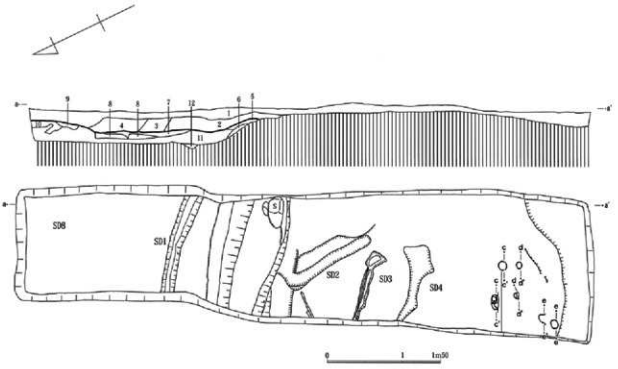


図10　Dトレンチ平面図・断面図

（5）E区

E区はD区の西隣に位置し、前述の溝状遺構SD1が引き続き見られる。この溝は幅35cm、深さ10cmほどの浅いものであるが、少し西に行ったところで西側へ延び、調査区をほぼ横断する溝と北側に方向を変える溝に分かれる。

また調査区南側のピットの状況から塀や垣などの直線的な施設があったと推定される。

西側には1間×1間の不整形な何らかの建造物SB4があったと推定される。この構造物は後述する井戸もしくは城に関連するものである可能性が高いと思われる。さらその西側には幅30cm長さ17mの溝跡SD5が南北に走るが、性格は不明である。

この調査区のちょうど中央にあるのが井戸跡SE163である。堀跡は南側から北側に傾斜しているが、この井戸の周囲は掘り込んであり平坦な形状をしている。堀の東西のラインに対して南北に地山である岩盤層を掘り上げている。地形上、南側は深く掘り込み、北側はその高さにあわせて平場をつくり、さらにその平場のうちを若干掘り込んで平坦なお盆状の形状を形成している。この井戸は地表面からのみ見ると石組井戸である。石組で囲まれた井戸の外側の一辺は1.3m程度で、表面積は1.70m²となる。また石組内側では1辺が60cm程度となり、表面積は0.36m²である。井戸の内側となる部分には比較的平べったい石が多く使われ、特に直線的になるように石が組まれている。井戸に立った時の使いやすさを考慮したと思われる。

この石組を取り除くと、4本の木柱が表れる。高さ2m70cmを数え、太さ11cm前後の柱である。この木柱に上部と中ごろと下部の3箇所にそれぞれ2つの枘穴をつくり、曲線を有する横木を使用し、その枘に相当する部分を3cm程度まで削ったものを枘穴に通し、上、中、下3箇所を、それぞれ4本の横木で固定している。横木は微妙な屈曲があるため、枘穴に入った段階では、むしろ固定しやすかったのでなはいかと推定される。

この井戸枠の据付については、事前に井戸の穴を掘り井戸枠の底の部分、つまり4本の木柱の底にあたる部分4箇所の岩盤層を丸く掘り込み、柱を据え付け易いようにして、井戸枠を設置している。さらに、木柱と木柱との間には、井戸の内側が平らになるように片側が真平らな木材（高さ1m80cmから1m95cm、幅20cm前後、厚さ3cmから6cm）を、木柱から木柱まで4枚づづ3本の横木にぴったりとくっ付かせ、下の岩盤層まで達するようにまわしている。なお、地上からここまでは2m程度となるが、掘り方は基本的に隅丸方形である。さらにその下は1m70cm前後で水源まで達するが、以下の掘り方は円形となる。

木柱底面までの井戸枠と木材に囲まれた外側と、岩盤層の掘り方の間は、主に黒色を中心とした粘土及びシルト質の土を埋め込み、木材が動かないようにされている。さらのこの上面に白色系を中心とした石を置いて形成している。特に木柱のある角には比較的大き目の石を配置しており、扁平な石の多くは縁に当たる部分に多い。

この井戸の地点からは砥石と唐津焼が出土している。

この井戸は当初の段階では、まわりが掘り窪ぼんでいるその中で、最大で高さ40cm長さ1m20cmもの大きさを持つ高まりであったことから、何か特別な遺構であるとの可能性もある

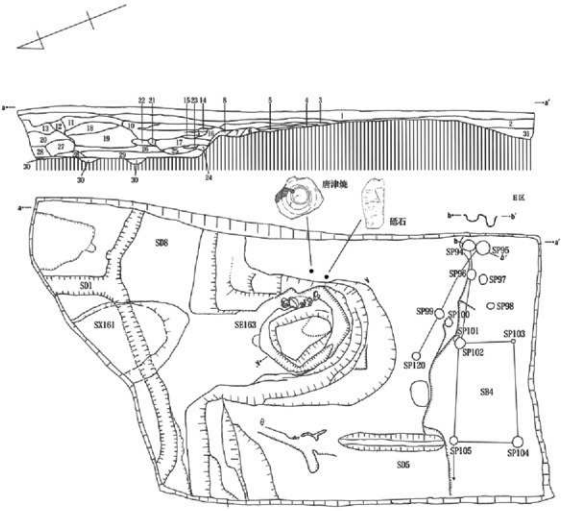


図11　E区平面図・断面図

と推定し、南北の断面を取りながら土を下げていった。その結果10層もの土により封鎖された井戸であることが判明したのである。中世から近世への移行期の遺構ではないかと考えている。

なお、石組みを取りあげ、若干土をとった段階で、曲物の底もしくは蓋の上部と推定される円形の板材の半分が2箇出土している。

この調査区で見逃してならないのは、岬状に南にむいて舌状に張り出した部分ＳＸ161である。高さは60cmほどあり、長さ２m40cm、幅１m40cmを計る。この上層は、他の地点の岩盤層と推定される層土を盛ったもので、厚さ10センチ強である。その下層は黒褐色のシルト層のうえに、数種の礫層、粘土層、シルト層など質も色も相違する土がみられる。これは、ある時期一挙に土を盛った結果と考えられる。この上に１m20cm程度の長さをもつ板を渡せば堀の内側から外側に容易に渡ることができる。

いつの時点での遺構であるかは、出土遺物が伴わないので確定できないが、C区からD区にかけて検出されている溝跡SD1が機能しなくなってから、その上に盛土したことがわかる。

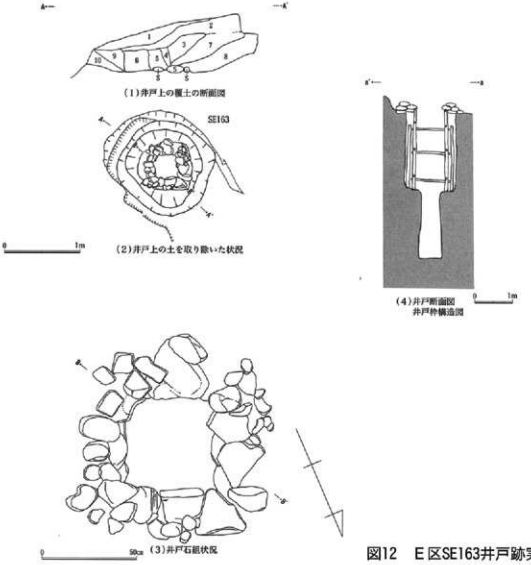


図12　E区SE163井戸跡実測図

（6）Fトレンチ

Fトレンチは「コ」の字形のトレンチであり、E区の西側にあたる。南側に伸ばしたトレンチ部分に遺構は確認できず、おもに北側の東西に伸ばした部分に遺構が集中した。この部分もやはり南側から北側に向かって傾斜している。地山に従って北側を下げていくと自然に水が入っていくる。ほぼ現在の側溝と接しているところである。堀に面して数個のピットがあるがどれも浅い。

ただし、SP113からSP108までは一直線にならぶことから、柵などの施設があったと思われる。

この調査区の成果としては、堀の形が北側に向かって曲がっていくことが確認されたことである。堀の形状は、Fトレンチの東端から西へほぼ５mの地点で40度程角度を北に曲げることになる。これは、現在の水路方向に堀跡が向いていくこととなる。

このことは、現在の水路部分と堀の位置が重複していることを示しているといえる。

なお、東西の土層の断面から、急な堀の落ち込みを読みとることができる。

（7）Gトレンチ・Hトレンチ

Gトレンチは、Fトレンチの西側にあり、南北に設定した調査区で、調査区の幅はすべて２mとしている。G－１トレンチは南北に、G－２トレンチはその西側の東西に、G－３トレンチはさらに西側の東西に設定した。長さはすべてほぼ10mである。この結果、AからFの地点でみられた、岩盤層ともいえる地山が確認できなかった。重機を使用し最深で表土より３mまで掘削を実施したが、検出されなかったのである。また遺構も確認できなかった。

Hトレンチは、C区から10m程度西側に設定したトレンチである。Gトレンチと同じく、幅２m、長さ10mを基準として実施した。東から西にかけて、H－１トレンチ、H－２トレンチ、H－３トレンチ、H－４トレンチである。この結果、HトレンチでもGトレンチと同じく岩盤層ともいえる地山が同様に確認できなかった。また遺構も検出されなかった。

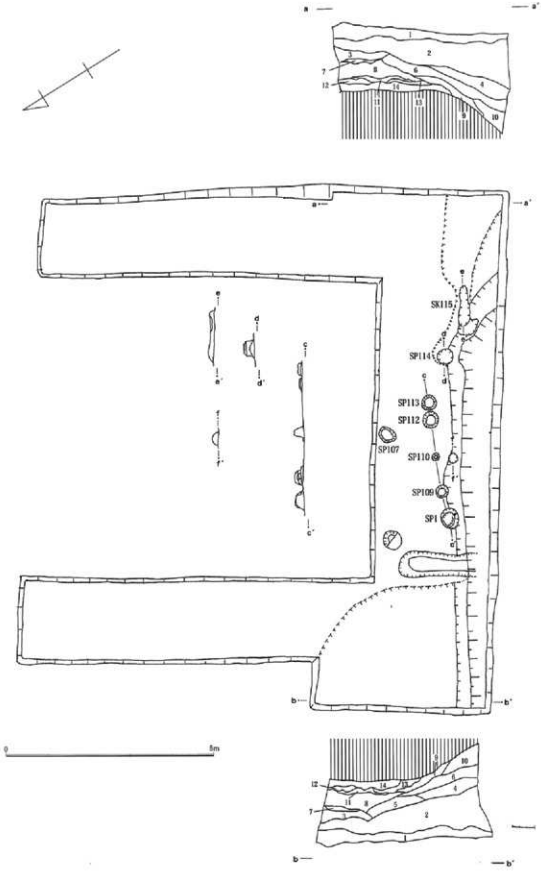


図13　Fトレンチ平面図・断面図

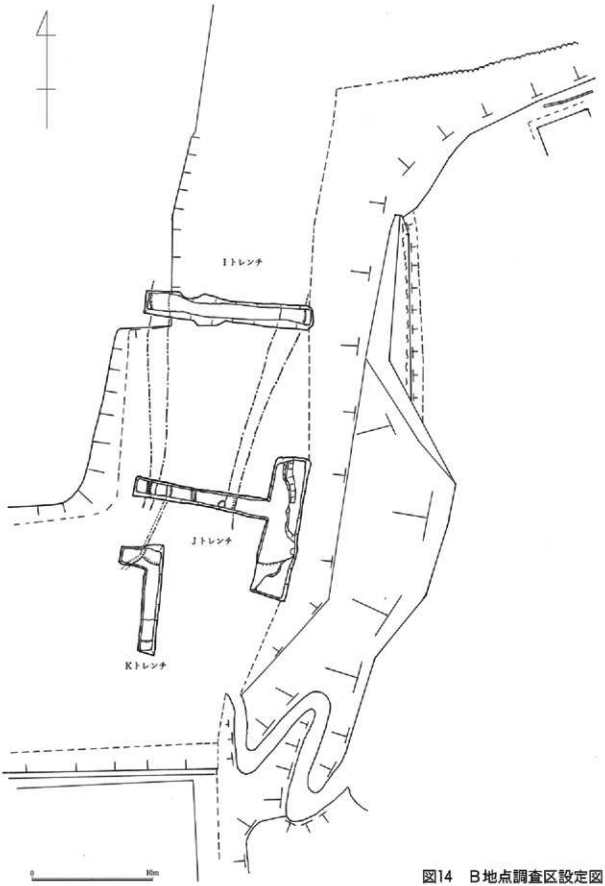


図14　B地点調査区設定図

2　B地点の遺構

(1) Iトレンチ

B地点は主郭の西側直下に当たり、現在でも窪んでいるところが確認できるため、堀跡であろうとの推測がなされていた。この地点にトレンチを3箇所設定し、堀跡の状況確認を中心に実施した。

まずIトレンチは調査区の一番北部に設定し、14m×2mとした。調査区東端では表土が数センチかぶっているだけで、直ちに地山である黄褐色の岩盤層ともいえる層を検出できる。この部分は後世に削平されたと思われる。この東端から20cmほど西にいくと堀状の落ち込みが始まる。落ち込みのラインから2m西の地点で深さ80cmとなる。この堀底の幅は8m50cmである。しかし西側の立ち上がりは緩斜面となり、堀の落ち込みから2m20cmの地点で堀底となり、高低差は20cm程度である。あるいは、もっと西側に明瞭な堀の立ち上がりがある可能性も否定できないが、開発される部分までの調査となるので、調査区の延長は実施しなかった。

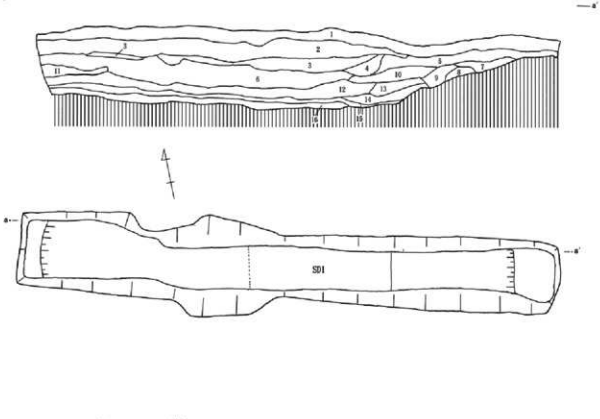


図15　Iトレンチ平面図・断面図

(2)Jトレンチ

Jトレンチは、Iトレンチより南に14m離れた地点に設定したトレンチである。

東西に2m×14m、南北に3.5m×14mの調査区が途中でつながるT字型を呈している。

おもに、堀の断面形状と堀の落ち込みの始まりのラインを確認する目的で設定した。主郭直下にあたる東側の南北のトレンチでは、第1に主郭の裾野部分が削平されていることを確認した。畑や宅地として利用されてきたためであろう。地形的には北東から南西にゆるやかに傾斜しており、特に北東角は一段高くなっている。この高まりから西に2m10cmほど行くと、堀の傾斜が始まる。南側も緩やかに傾斜しているが、三角形をした一番深いところで幅30cmの溝状遺構（SX4）を検出した。さらに南側は撹乱されている。東西のトレンチでは、Iトレンチから続くものと思われる堀跡SD1を検出した。上面で幅3m90cm、底面で2m40cmとなる。堀底には径30cm程の土壙SK5の外、SD2とSD3の2本の溝跡を確認した。

土層からみて、この地点は自然に土が堆積したものではなく、人為的に土を入れたと考えられる。

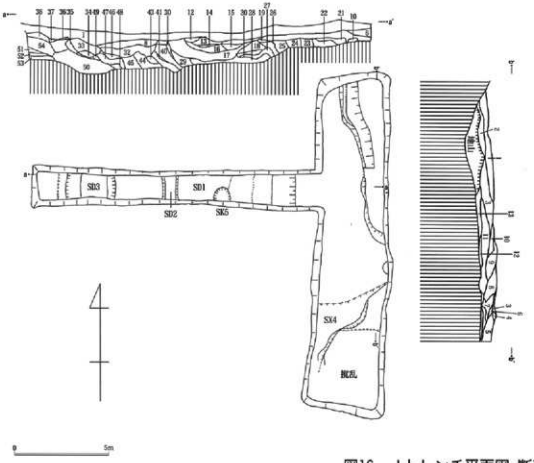


図16　Jトレンチ平面図・断面図

(3) Kトレンチ

KトレンチはJトレンチの南西に5m前後離れたところに位置する。はじめ南北に2m×10mを設定したが、遺構確認のため西に2m×3m延長した結果L字型となっている。

ここでは明確な堀跡は確認できなかった。南側の土層番号21と27は動いていない水平な堆積をみせ、土質も溝跡の中にみられるような黒褐色のシルト層を示している。また北側の5と8も同様である。それ以外の土に関しては、動いているといって過言ではない。この場所は最近まで安達峰一郎博士の生家があったところで、生家をこの地点に移し、再びもとの位置に移した2回にわたる工事により撹乱されたと推定される。

遺構ではSX6の浅い落ち込みと溝跡と推定されるSD7を検出した。SD7はJトレンチのSD3の南側につながると思われる。

このことは、この地点は堀底の一部であることを示している。堀跡は主郭からその西側の郭に沿って、現在の地形通りL字型に南北から東西に向け直角に屈曲するところであるため、堀を大きくとったと考えられる。

ただし、この地点の南東には主郭の搦手口ともいえる急な斜面の道があるが、その道が城郭であった時代から続いているものであるとした場合、その虎口と、堀の接続状況は不明となった。

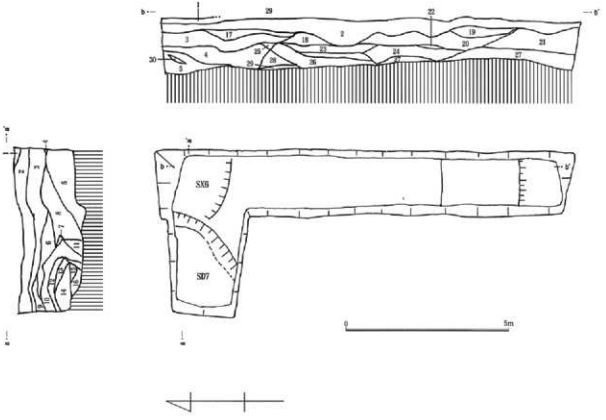


図17　Kトレンチ平面図・断面図

3　出土遺物

出土遺物に関しては、古墳時代の土師器が一番多く出土している。

A地点では、中・近世に関連する出土品もみられた。

ここでは、A、B両地点の出土した遺物をまとまて報告する。

(1) 縄文土器

縄文時代の土器は3点出土している。小片のため確かではないが縄文中期頃の深鉢の一部であろうと推定される。D区の堀跡が南に向いて高くなり、そのピークを越え南側が若干低くなる地点の地山直上などから土器は出土している。

(2) 土師器及び須恵器

土師器は今回の出土品でもっとも多い。A・B地点を含め計74点が出土した。ほとんどが住社式で6世紀でも比較的早い時期が想定される。器種としては、坏、壷、甕などである。

出土状況としては土壙内に入りこんでいるものと、堀の覆土・堆積土中から出土するものでほとんどを占める。土壙内の土器はすべて小片であることから後世に埋めたものと推定される。

坏に関しては、内黒と非内黒の2者がみられる。小片のため明確にはいえないが、半数が内黒と推定される。内黒は内黒土師器特有の稜線を明確にもつものが中心となるが、非内黒は口縁部が若干外反するもの、緩く立ち上がるもの、内側に内湾するものに分けられる。

壷は確認できるもので25点ほど出土しており、一度外反しさらに立ち上がるものもみられる。甕も22点ほど確認できる。いわゆる胴長のものが比較的少ない。坏の底部のような形状から真直ぐに立ち上がり内湾をみせる小型のものも見うけられる。鉢と思われるものも出土している。須恵器は2点出土した。いずれも奈良か平安時代頃のものであると思われる。

(3) 中世～近世の陶磁器

確実に中世まで溯れる遺物は青磁（図22－78）が1点で、器種としては碗である。

唐津焼の碗（図22－79）は16世紀末から17世紀はじめのものと思われる。また17世紀前半の肥前の皿（図22－81）も出土している。

(4) 近世～近代の陶磁器

染付のほとんどの産地は肥前である。18世紀後半から近代のものが多い。器種は碗がほとんどである。

(5) 木製品

Eトレンチの井戸跡SE163より出土したもののみである。

まず井戸枠四隅の4本の木柱は、長さ2m70cmを数え、太さ11cm前後の柱である。この木柱には上部と中ごろ下部の3箇所にそれぞれ2つの枘穴が掘られている。

その木柱を繋ぐ横木は12点出土した。曲線を有する長さ80cm、幅8cm前後のもので、その両端を枘として使用するため、3cm程度まで削っている。

その外には、井戸枠の内側が平らになるように片側が真平らな木材（高さ1m80cmから1m95cm、幅20cm前後、厚さ3cmから6cm）が16点出土している。

こういった形式の井戸は中世以降のものであろう。

さらには石組みを取りあげ、若干土をとった段階で、曲物の底も若しくは蓋の上部と推定される円形板材の半分が2点出土している。

(6) 石製品

全部で4点が確認された。縄文時代の剥片石器が1点、弥生時代後期のアメリカ式石鏃が1点、井戸跡近くと、C区の地山より砥石がそれぞれ1点、出土している。

Ⅳ まとめと考察

1 本城郭の様相と性格

高楯城は、丘陵台地を利用した平山城で、山頂部は東西20m、南北26mの平坦地となるが、その下にはいくつかの郭が築かれ、その麓部には江戸時代の絵図から堀がめぐらされていたと推定されていた。またその周囲には清水の湧き出る井戸が何箇所かある。

まわりには集落が形成され、それを囲むようにして東西と北面に堀がめぐる。また南面は深い沢が堀の役目をしており、山野辺城との間を区画していた。

東側にも集落があり、東北方向には3重の堀をまわしていた。

武田泰造氏、後藤禮三氏の研究により、現在こうした高楯城の縄張りが明らかとなってきている。

この城は、武田信安が、最上家の命を受け宝徳元 (1449) 年に築城したといわれている。

その後、最上氏と姻戚関係にある高楯遠江守が城主となり、元和8年 (1622) の最上家改易まで城は存続するといわれていた。今回、青磁などの発掘により中世においても、文献がしめすごとく高楯城が存在することがあらためて確認された。

また、古墳時代の土師器が多く出土したことは、古墳時代の6世紀前葉において、高楯城周辺が生活の場となっていたことを示している。この高楯城からもっとも近い古墳としては大寺地区に坊主窪古墳群があるが、その1号墳は墳形より6世紀の古墳ではないかと推測されている。

さて、最上家改易の際この城が破却されたかどうか定かではない。破却という行為はいわゆる象徴としての行為といわれており、本城に対しては行われるが、高楯城のような支城のうちでも小規模な城で行われたかは不明である。しかし、C区における薬研堀を一度に埋めた状況を参考にすると、城の破却が行われた可能性は強いと考えられる。

また、近世においても堀の外側にあたるA地点では、引き続き生活が営まれていたことがわかった。堀を渡る際には岬状に盛土をして、板などを渡して、往来していたと推定される。

井戸を完全に閉鎖した状況もあるが、この行為がいつ行われたのか不明である。あるいは城の破却と関連する可能性も考えられる。

2　まとめ

今回の調査で、あらためて、高楯城の主郭の周囲を堀がほぼ一周する可能性が高まった。

堀の幅は一番狭いところでも３m90cmを計り、その形状は箱堀となっている。A地点の堀跡SD8については空堀であり、B地点の堀については部分的に若干の水が溜まっていたと推定される。地形に応じて縄張をしたものと考えられる。

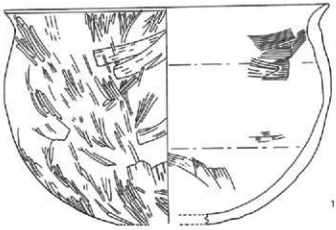
高楯城の縄張上、最も不思議な点は、主郭南側の郭が主郭に比べあまりにも大きく平坦面が広いことである。現在道路で切断されているが、以前はつながった丘であったという。

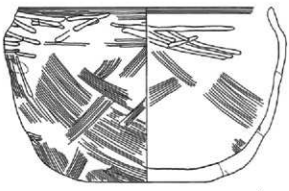
東側や西側の麓との比高差を考えても、防御には向いていないと推定する。

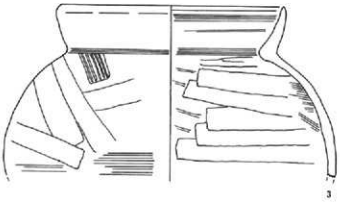
大江氏や伊達氏との最前線の城としては、不十分であると思われる。

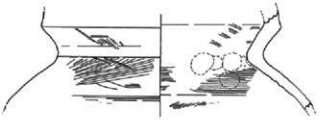
以上のようなことを総括すると、中世においては、高楯城は小規模な館であったものを、戦国末期から近世初頭になって、高楯氏が近世城郭として整備を行い、集落と道路を整備し、広い郭と二、三重の堀を持つ近世的な城としたと推測されるのである。

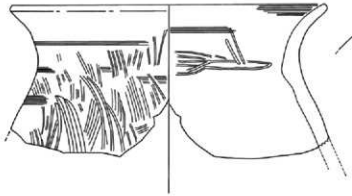
参考文献
山辺町『山辺町郷土概史』1970
山形県教育委員会『山形県中世城館跡調査報告書第２集』1996

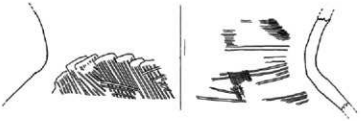


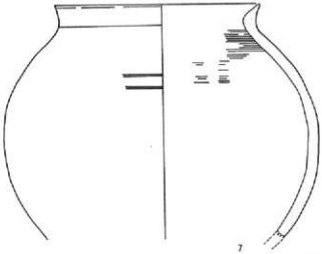


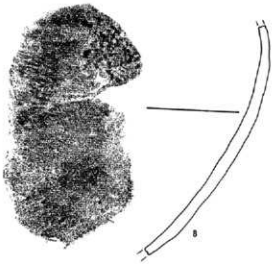






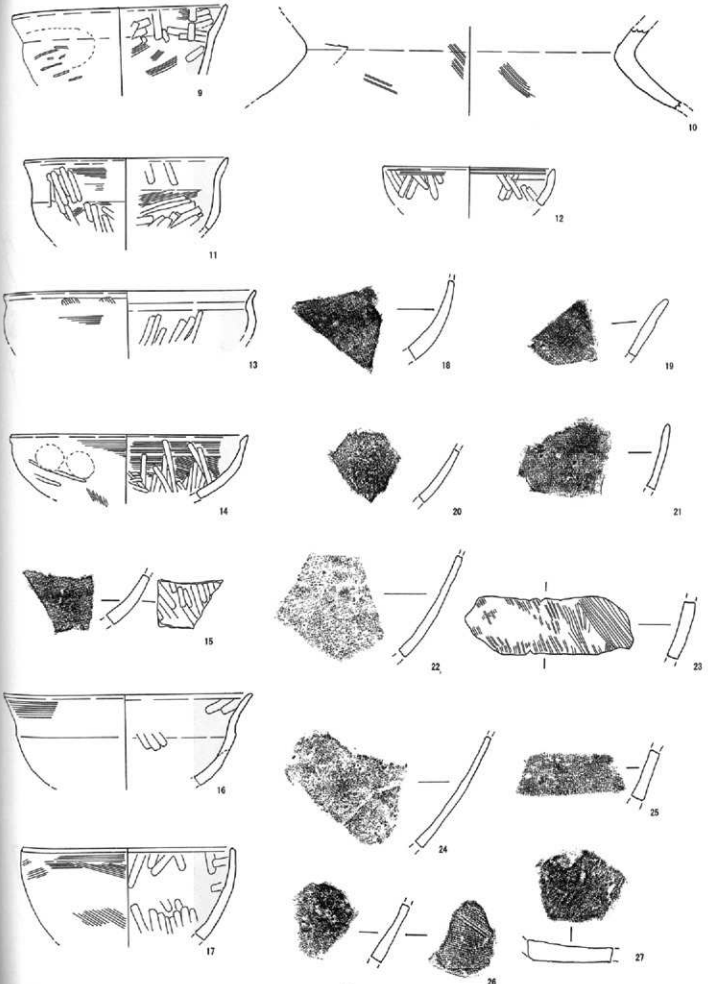






0 10cm (1:2)

図18　出土土器陶磁器(1)



0 10cm (1:3)

図19　出土土器陶磁器(2)

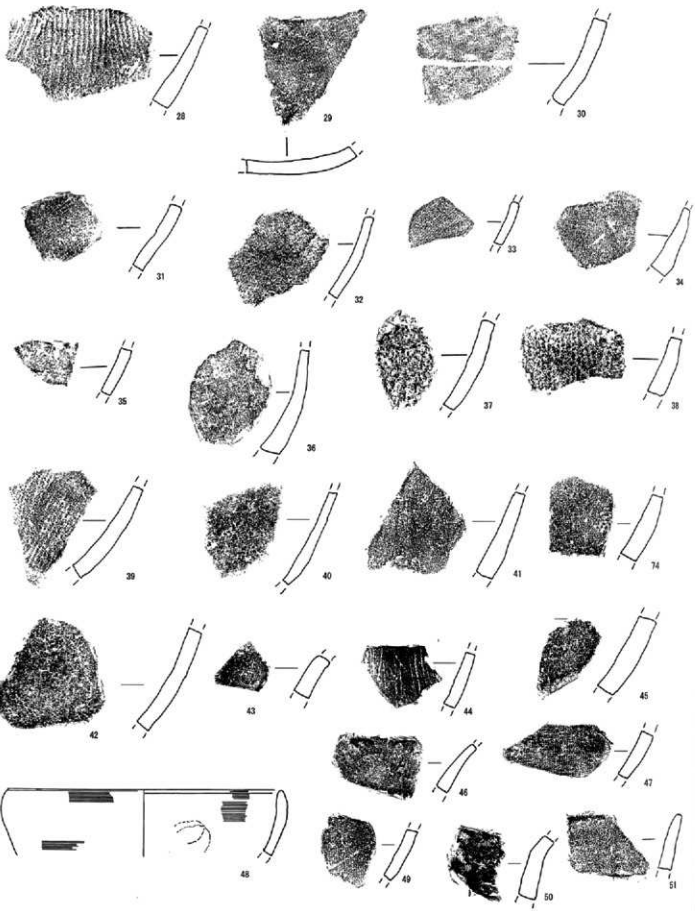


図20　出土土器陶磁器(3)

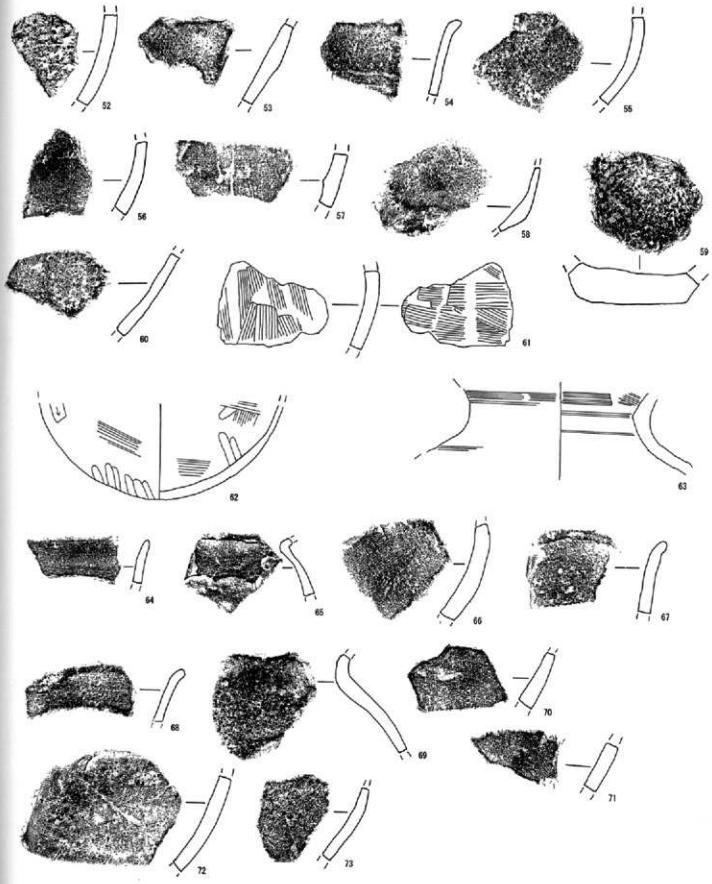


図21　出土土器陶磁器（4）

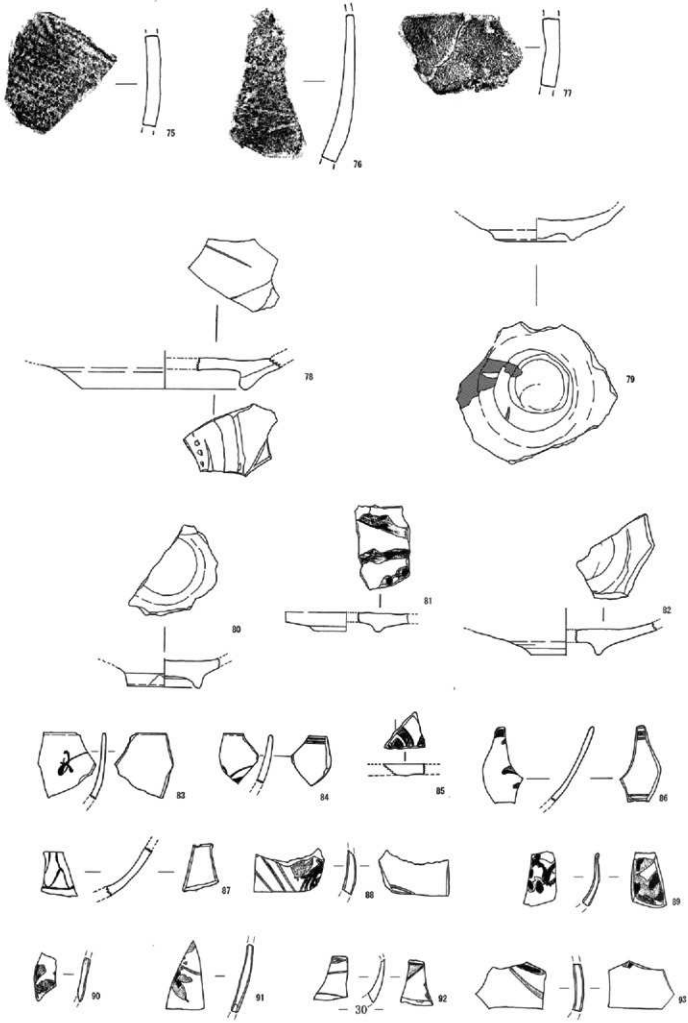


図22　出土土器陶磁器（5）

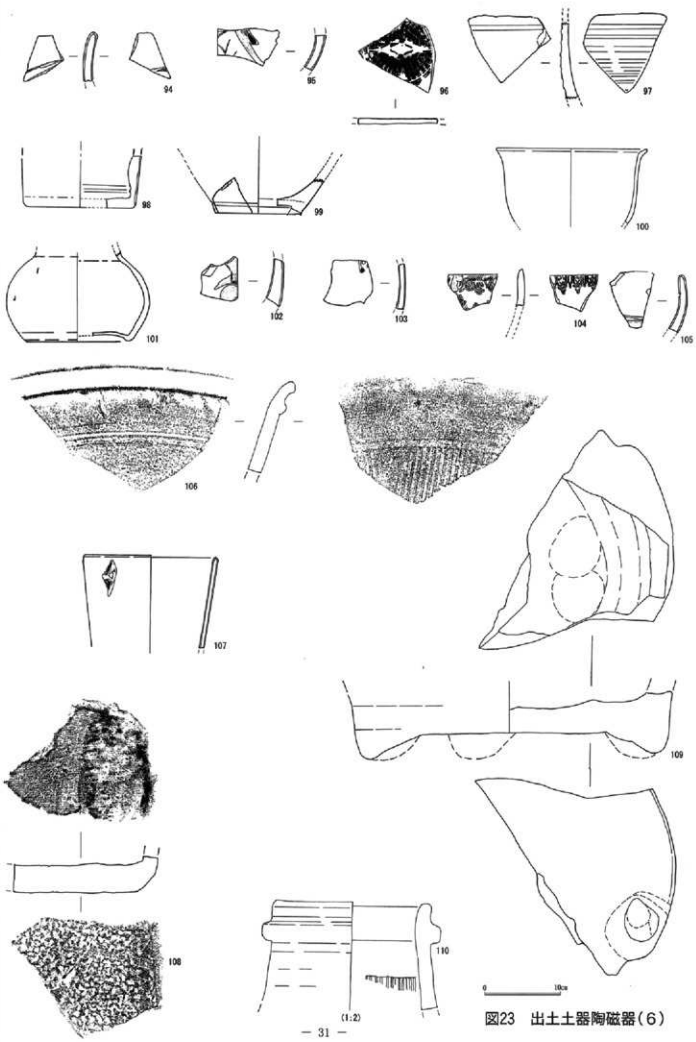


図23　出土土器陶磁器(6)

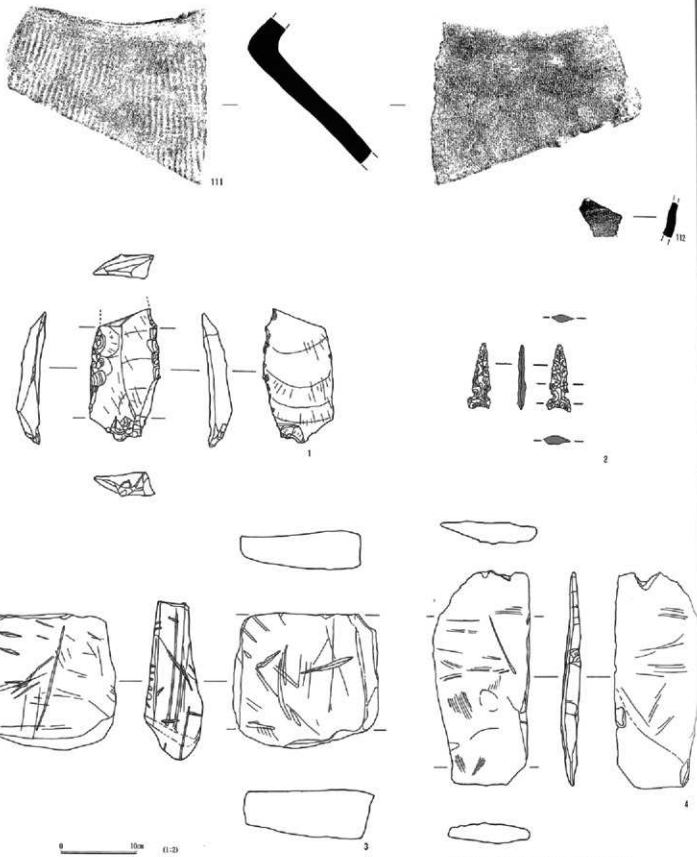


図24　出土土器陶磁器(7)
出土石製品

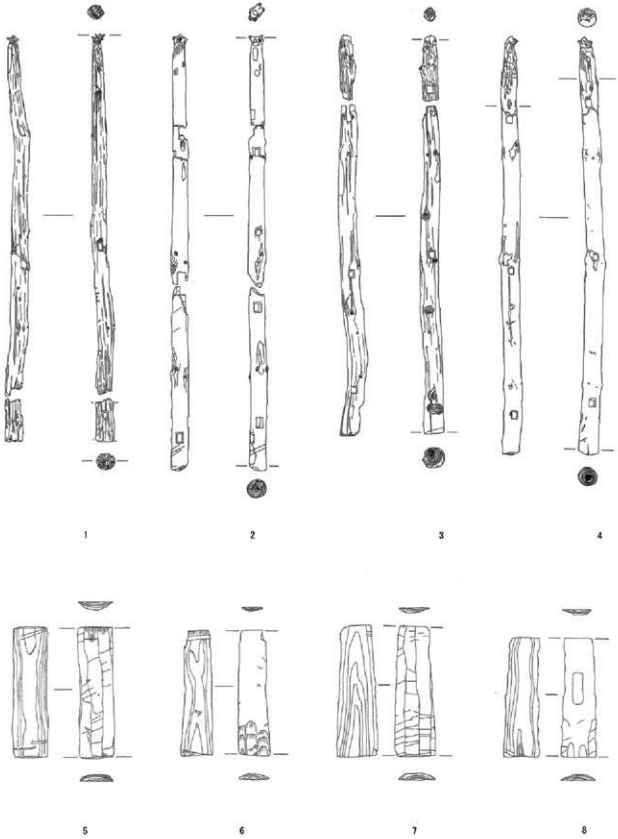


図25　出土木製品（1）

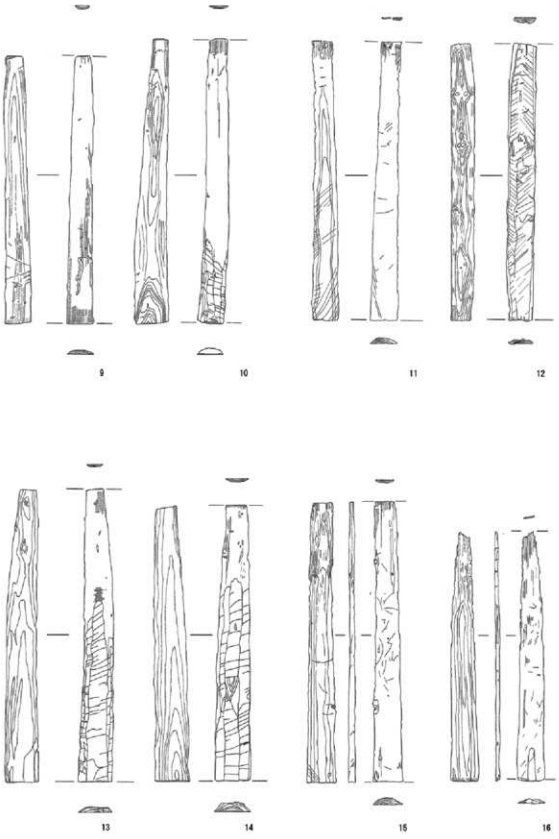


図26　出土木製品(2)

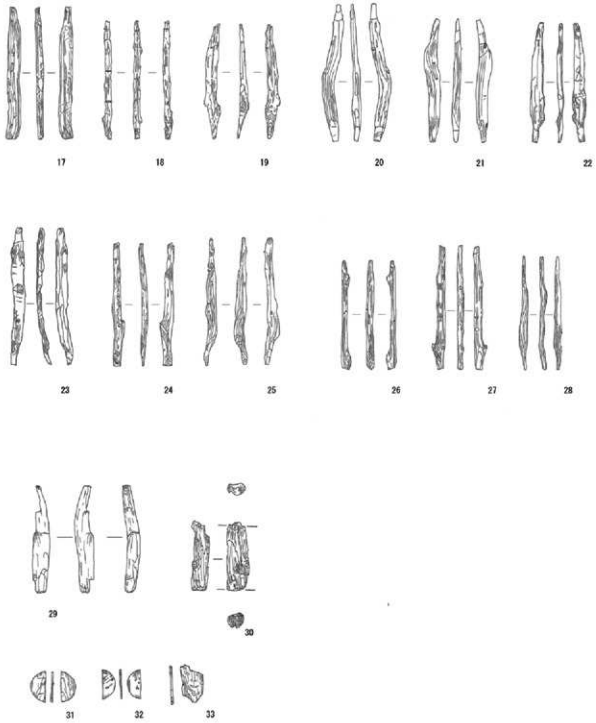


図27　出土木製品（3）

出土遺物観察表

出土土製品（1）

遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整 外面	内面	備考
1	18-1		土師器	壺	Kトレ5	(174)	－	115		ミガキ・ケズリ	ヨコハケ	丸底
2	18-2	5-2	土師器	甕	Jトレ5	(140)	64	92	4	ミガキ・ナデ（黒色）	ミガキ・ナデ（黒色）	
3	18-3	5-3	土師器	甕	A地点	(144)	－	－	5	ケズリ・ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ	
4	18-4		土師器	壺	C区U19	頸部 (110)	－	－	7	ヨコナデ	－	頸部
5	18-5		土師器	甕	JトレX	，(167)	－	－	8	ナデ・ハケメ	－	胴長径180
6	18-6		土師器	甕	SK126	頸部 (142)	－	－	9	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ケズリ	DRP20
7	18-7		土師器	鉢	Kトレ5	(108)	－	－	6	ヨコナデ	ヨコナデ	
8	18-8		土師器	甕	Kトレ3	－	－	－	7	摩滅	摩滅	PR29·38内黒
9	19-9		土師器	坏	A地点	，(115)	－	－	4	ヨコナデ	ヘラミガキナデ	内黒
10	19-10		土師器	壺	A地点	頸部 (174)	－	－	12	ナデ	ナデ	
11	19-11		土師器	坏	A地点	(109)	－	－	4	ケズリ→ヨコナで→ミガキ・ハケメ	ケズリ→ヨコナデ	内黒
12	19-12		土師器	坏	A地点	(90)	－	－	4	ミガキ・ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	内黒
13	19-13		土師器	坏	C区U19	(136)	－	－	4	ハケメ	－	内黒RP9
14	19-14		土師器	坏	A地点	，(128)	－	－	6	ヨコナデ・指押痕あり	ヨコナデ→ミガキ	内黒
15	19-15		土師器	坏	A地点	－	－	－	8	ナデ	ミガキ	内黒
16	19-16		土師器	坏	C区U19	，(135)	－	－	5	ヨコナデ	ミガキ	内黒RP6
17	19-17	5-17	土師器	坏	A地点	(113)	－	－	5	ヨコナデ	ヨコナデミガキ	内黒RP4
18	19-18		土師器	坏	A地点	－	－	－	4.5	ナデ	ナデ	内黒
19	19-19		土師器	坏	A地点	－	－	－	6	ナデ	ヨコナデ→ミガキ→タテナデ	内黒 口縁部
20	19-20		土師器	坏	A地点	－	－	－	5	ナデ	ナデ	内黒
21	19-21		土師器	坏	C区U19	－	－	－	5	ナデ	ミガキ・ナデ	内黒RP32
22	19-22		土師器	甕	Kトレ3	－	－	－	5	ナナメハケ	不明	両黒RP37
23	19-23		土師器	甕	Kトレ3	－	－	－	6	ハケメ	ナデ	内黒
24	19-24		土師器	甕	Kトレ3	－	－	－	5.5	ヨコハケ	ナナメハケメ	内黒RP36・41
25	19-25		土師器	坏	Jトレ1	－	－	－	7	ヨコナデ	ヨコナデ胎土粗い	内黒RP134
26	19-26		土師器	甕	A地点TP	－	－	－	5	ヨコナデハケメ	ヨコ・ナナメハケメ	RP8
27	19-27		土師器	甕	A地点	－	－	－	底部 10	ナデ沈線	ナデ・ミガキ	
28	20-28		土師器	甕	Jトレ4	－	－	－	8	タテ→ナナメハケメ	ヨコナデ	RP153
29	20-29		土師器	坏	A地点	－	－	－	底部 8	タテミガキ・ナデ	ヨコナデ	
30	20-30		土師器	甕	Jトレ2	－	－	－	10	ヨコナデ・ミガキ	ヨコハケ・ナナメハケ	RP141、140
31	20-31		土師器	坏	Jトレ1	－	－	－	6	ヨコナデ	ヨコナデ	RP135
32	20-32		土師器	坏	Jトレ1	－	－	－	5	タテミガキ	ヨコナデ	RP136坏
33	20-33		土師器	坏	A地点	－	－	－	4	ヨコナデ	ヨコナデ	内黒
34	20-34		土師器	壺	Jトレ1	－	－	－	9	ヨコナデ	ナデ	RP133
35	20-35		土師器	壺	Kトレ5	－	－	－	6	ヨコ・ナナメナデ	ヨコナデ	RP84
36	20-36		土師器	壺	Iトレ1	－	－	－	8	タテミガキ・ヨコナデ	ヨコハケ	RP132
37	20-37		土師器	壺	Kトレ4	－	－	－	8	ナデ	ヨコナデ	RP69
38	20-38		土師器	壺	A地点	－	－	－	8	タテハケ	ヨコナデ	
39	20-39		土師器	壺	A地点	－	－	－	11	タテハケ	ヨコ・ナナメハケ	
40	20-40		土師器	壺	Kトレ4	－	－	－	6	ヨコハケ	ナナメハケ	内黒RP51
41	20-41		土師器	坏	A地点	－	－	－	8	ナデ	ヨコナデ	
42	20-42		土師器	甕	Jトレ4	－	－	－	9	ヨコナデ	ヨコナデ	RP152
43	20-43		土師器	甕	Jトレ3	－	－	－	11	ヨコナデ	ナナメナデ	RP151
44	20-44		土師器	壺	A地点TP	－	－	－	7	タテミガキ（黒色）	ヨコナデ	RP7
45	20-45		土師器	甕	C区U19	－	－	－	14	ヨコナデ	ヨコナデ	RP5
46	20-46		土師器	壺	C区U19	－	－	－	8	タテ・ナナメ・ナデ	ヨコナデ	
47	20-47		土師器	壺	Jトレ3	－	－	－	7	ヨコナデ	ヨコナデ	RP144
48	20-48		土師器	坏	A地点	(140)	－	－	6	ヨコナデ	ナデ・指当て痕	白い色調
49	20-49		土師器	坏	A地点	－	－	－	5	タテミガキ	ヨコナデ	両黒
50	20-50		土師器	壺	A地点TP	－	－	－	9	摩滅	ヨコナデ	脚部
51	20-51		土師器	坏	A地点	－	－	－	9	ヨコナデ	ヨコナデ	内灰色 斑（内黒）
52	21-52		土師器	壺	Kトレ2	－	－	－	8	ナデ	ナデ	RP28-30

53	21-53		土師器	甕	CKU19	−	−	−	9	ヨコナデ	ヨコナデ	[illegible]
54	21-54		土師器	坏	DKT18	−	−	−	4	ナデ比離	ナデ	RP33
55	21-55		土師器	壺	DKT19	−	−	−	6	ヨコハケ	ヨコハケ	RP1赤い色調
56	21-56		土師器	坏	DKT18	−	−	−	6	ヨコナデ	ナデ・指当て痕	P14
57	21-57		土師器	坏	DKT18	−	−	−	8	ナデ	タテミガキ	P10内黒
58	21-58		土師器	坏	A地点SK126	−	−	−	3.5	ヨコナデ	不明	RP21
59	21-59		土師器	甕	JトレX	−	−	−	底部16	ナデ	ナデ	RP189
60	21-60		土師器	甕	CKU19	−	−	−	6	タテハケ	ヨコハケ	RP50
61	21-61		土師器	甕	JトレB	−	−	−	8	ハケメ	ハケメ	RP103・131
62	21-62		土師器	壺	A地点	−	−	−	5	ミガキ・ヨコナデ	ナデ	赤色
63	21-63		土師器	甕	Kトレ3	頸部(100)	−	−	12	ヨコナデ	ヨコナデ 口縁ヨコハケ	RP40
64	21-64		土師器	坏	Jトレ3	−	−	−	6	ヨコナデ	ヨコナデ	RP148
65	21-65		土師器	壺	Jトレ4	−	−	−	6	ヨコナデ	ヨコナデ	頸部RP154
66	21-66		土師器	壺	Jトレ1	−	−	−	8	ヨコナデミガキ	ヨコナデ	赤色RP130
67	21-67		土師器	壺	A地点	−	−	−	7	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部
68	21-68		土師器	壺	A地点SD12	−	−	−	5	ナデ比離	ヨコハケ	P19
69	21-69		土師器	甕	Kトレ5	−	−	−	12	ヨコナデ	ヨコナデ・ヨコハケ	RP93
70	21-70		土師器	甕	A地点	−	−	−	10	ヨコナデ	ミガキ	
71	21-71		土師器	甕	A地点	−	−	−	9	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	
72	21-72		土師器	坏	Jトレ1	−	−	−	10	ヨコナデ	ヨコナデ	RP139
73	21-73		土師器	甕	Kトレ4	−	−	−	7	タテハケ	ヨコナデ	RP55
74	20-74		土師器	壺	A地点SD128	−	−	−	7	ナデ	ナデ	RP22
75	22-75		縄文土器	深鉢	A区	−	−	−	9	網目・撚紋	−	
76	22-76		縄文土器	深鉢	Fトレ T19	−	−	−	9	沈線	−	
77	22-77		縄文土器	深鉢	D区 T18	−	−	−	10	沈線	−	
111	22-78		須恵器	甕	A区TP	，(28)	−	−	10	ハケメ	アテ痕・ナデ	
112	22-79		須恵器	坏	E区	−	−	−	5	ナデ	ナデ	

出土土製品（2）

遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	備考
78	22−78	巻頭図版	青磁	碗	A地点	—	88	—	8	15c
79	22−79	巻頭図版	唐津	碗	E区 井戸付近	—	38	—	10	16c後〜17c前
80	22−80	5-80	染付	碗	C区 R18	—	39	15.5	5	肥前 PR24 18c
81	22−81	5-81	染付	皿	D区 T18	—	35	10	7.2	肥前 RP16 17C前半
82	22−82	5-82	染付	碗	A地点	—	37	—	7	肥前 P52 18c
83	22−83		染付	碗	A地点	74	—	35	3	肥前
84	22−84		染付	碗	A地点	54	—	22	3	肥前
85	22−85		染付	皿	A地点	—	—	22	6	肥前
86	22−86		染付	碗	A地点	—	—	47.5	3	肥前
87	22−87		染付	碗	A地点	—	—	32.5	6	在地
88	22−88		染付	碗	D区	—	—	—	5	肥前 RP33
89	22−89	5-89	染付	碗	A地点SD126	—	—	—	4	肥前 RP23
90	22−90	5-90	染付	碗	A地点SD124	—	—	—	3	肥前 RP23
91	22−91		染付	碗	D区	—	—	—	4	肥前 RP11
92	22−92		染付	碗	D区	—	—	—	4	肥前 RP11
93	23−93		染付	碗	A地点SD124	—	—	—	4.5	肥前 RP25
94	23−94		染付	碗	A地点SD124	—	—	—	5	肥前 RP25
95	23−95		染付	碗	A地点	—	—	—	5	肥前 RP15
96	23−96	6-95	染付	皿	D区	—	—	—	4	肥前・近代 RP15
97	23−97		磁器	碗	A地点SD123	—	—	40	6	在地 RP18
98	23−98		染付		A地点SD124	—	—	—	7	在地 RP23
99	23−99		染付	碗	A地点	—	—	—	8	在地
100	23−100		染付	碗	A地点	—	—	—	4	在地
101	23−101		磁器		A地点	—	53.6	—	3	在地・近代

102	23－102		染付	碗	A地点SK126	—	45	16.5	8	肥前 RP21
103	23－103		染付	碗	A区	—	—	—	4	肥前
104	23－104		染付	碗	A地点	—	—	—	4	肥前
105	23－105		染付	碗	A地点U19	—	—	—	3	肥前 RP26
106	23－106		陶器	擂鉢	A地点	—	—	—	10	RP15
107	23－107		磁器		A地点 SD15	—	—	—	3	在地
108	23－108		瓦質土器	火鉢	Jトレンチ	—	—	—	14.5	RP187
109	23－109		瓦質土器	火鉢	Jトレンチ	—	—	—	12	RP189
110	23－110		陶器		A地点SD124	—	—	—	8	RP23

出土石製品

遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	計測値（mm）			備考
						長さ	幅	厚さ	
1	24－1	6－1	石器	剥片	A地点	65	36	10	硅質岩
2	24－2		石器	石鏃	B地点	32	10	4	アメリカ式石鏃（弥生時代）
3	24－3	巻頭図版	石製品	砥石	E区井戸	113	51	11	
4	24－4		石製品	砥石	C区側溝	77	75	30	

出土木製品

遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	出土位置	計測値（mm）			備考
						長さ	幅	厚さ	
1	25・1	6－1	木製品	井戸枠	E区井戸跡	2720	90	95	RW-49・51
2	25・2		木製品	井戸枠	E区井戸跡	2775	90	125	RW-25・61・62・48
3	25・3		木製品	井戸枠	E区井戸跡	2535	115	125	RW-64・99
4	25・4	6－4	木製品	井戸枠	E区井戸跡	2735	115	115	RW-24・65
5	25・5		木製品	井戸枠	E区井戸跡	84	21	4	RW-45
6	25・6	6－6	木製品	井戸枠	E区井戸跡	800	165	3,5	RW-46
7	25・7		木製品	井戸枠	E区井戸跡	840	225	4,5	RW・43
8	25・8	6－8	木製品	井戸枠	E区井戸跡	765	200	4	RW・47
9	26・9		木製品	井戸枠	E区井戸跡	1770	150	25	RW・50
10	26・10		木製品	井戸枠	E区井戸跡	1885	150	40	RW・151
11	26・11		木製品	井戸枠	E区井戸跡	1840	150	40	RW・152
12	26・12	6－12	木製品	井戸枠	E区井戸跡	1825	150	25	RW・154
13	26・13	6－13	木製品	井戸枠	E区井戸跡	1930	199	35	RW・153
14	26・14		木製品	井戸枠	E区井戸跡	1820	210	65	RW・66
15	26・15		木製品	井戸枠	E区井戸跡	1850	160	45	RW・68
16	26・16		木製品	井戸枠	E区井戸跡	1650	155	25	RW－67
17	27・17		木製品	井戸枠	E区井戸跡	870	80	45	RW・63
18	27・18		木製品	井戸枠	E区井戸跡	775	40	40	RW・55
19	27・19		木製品	井戸枠	E区井戸跡	755	75	40	RW・22
20	27・20	6－20	木製品	井戸枠	E区井戸跡	905	78	45	RW・76
21	27・21		木製品	井戸枠	E区井戸跡	815	55	45	RW・74
22	27・22		木製品	井戸枠	E区井戸跡	785	70	30	RW・26
23	27・23	6－23	木製品	井戸枠	E区井戸跡	905	65	30	RW・23
24	27・24		木製品	井戸枠	E区井戸跡	810	50	35	RW・56
25	27・25		木製品	井戸枠	E区井戸跡	840	60	60	RW・29
26	27・26		木製品	井戸枠	E区井戸跡	715	35	45	RW・30
27	27・27		木製品	井戸枠	E区井戸跡	810	45	40	RW・27
28	27・28		木製品	井戸枠	E区井戸跡	750	40	40	RW・28
29	27・29		木製品	井戸枠	E区井戸跡	705	105	80	RW・100
30	27・30		木製品	井戸枠	E区井戸跡	450	135	95	RW・155
31	27・31	6－31	木製品	曲物	E区井戸跡	200	100	10	RW・53
32	27・32	6－32	木製品	曲物	E区井戸跡	195	85	10	RW・52
33	27・33		木製品	井戸枠	E区井戸跡	250	140	10	RW・157

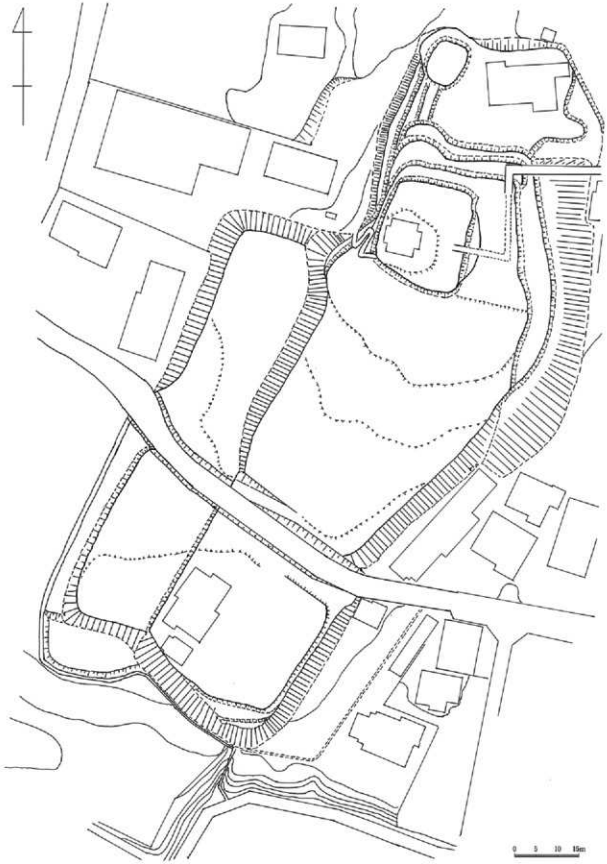


図28　高橋城縄張図

第２章

山辺付近の地形的・地質的特徴について
－特に『高楯』付近について－

大場　總
(山形県立博物館専門嘱託)

この報告は、高楯城の発掘調査に伴い、『高楯』について地形的・地質的な考察を試み、その形成過程を探るものである。

Ⅰ、山辺付近の地形の特徴について

（1）山形盆地の形成について

山形盆地は新生代新第３紀中新世からはじまる東北日本地質区の造山運動に伴う造構運動によって形成されたものである。海底に沈んでいた裏日本が奥羽山脈として隆起を始めたのは新第３紀中新世末である。後期中新世には日本海と太平洋を分け、前期鮮新世には、現在の内陸部が大きな内海となった。後期鮮新世には出羽丘陵も隆起し、内陸は庄内の海と区別され、この時期に内陸盆地の原形が形成されたものと考えられる。

第４期に入って盆地と山地の分化が著しく進んだ。山形盆地の東側の奥羽山脈の激しい隆起運動はＶ字谷を刻み、急峻な地形を形成し、侵食による多量の砕屑物は、山地から平坦部に臨むところに堆積し、乱川・立谷川及び馬見ヶ崎の大扇状地が発達している。一方、盆地の西側にあたる山辺付近では、浸食小起伏地形といわれる丘陵地形を示している。平坦部との遷移部には極く小規模な扇状地を形成するにすぎない。

盆地の東側と西側では対称的な地形を示しているが、東側の隆起と西側の沈降という造構運動の対称性の反映と考えられる。

（2）『高楯』付近の地形について

山辺付近の小地形に注目してみると、丘陵東側の平坦部には山辺から長谷堂にいたる須川左岸の河岸段丘が丘陵に接している。さらにこの上に小規模な扇状地を作っている。

一つは、丘陵に接して大寺小学校・天神を乗せる小鶴沢川扇状地であり、もう一つは北ノ宿・西町を乗せる愛宕沢川扇状地である。いずれも極く小規模な扇状地である。

地形的に特に目を引くのは『高楯』の高台が、この２つの扇状地を南と北に分割していることである。すなわち、２つの扇状地の両翼が接合する地点に『高楯』が位置している。

小鶴沢川扇状地の南翼の一部がこの『高楯』で発達が妨げられているし、愛宕沢川扇状地の北翼も一部がさえぎられている。『高楯』の存在が、両方の扇状地の発達に関わっていると考えられる。また、２つの扇状地の間に『芦沢』の低地を作っているが、『高楯』がその前面にあるため芦沢沼沢地とでもいうべき湿地が形成されたと考えられる。

Ⅱ、山辺付近の地質について

（1）山辺付近の丘陵の地質について

この地域の地質層序は、最下位の基盤岩は花崗岩（中世代）であり、新第３系の本道寺層（中期中新世；深海の堆積層）が不整合に覆い、水沢層（中期中新世；海成層）、間沢層（後期中新世；海成層）・本郷層（後期中新世；海成層）と整合的に重なり、さらに上位に左沢層（後期鮮新世；湖沼成層＝亜炭層を挟在）が不整合に覆う。

山形盆地西側にあたる山辺周辺は、本郷層の橋上砂岩部層が丘陵部分に広く分布している。

下位の地層は侵蝕をうけた丘陵の沢筋に僅かに観察されるにすぎない。この付近の橋上砂岩部層は石英を多く含む砂岩であるが、凝灰質が優位な岩相を呈する。無層理の凝灰質砂岩を主とするが、長径が数mにも達する巨塊（角礫）を含む特徴をもつ。巨大岩石塊の岩質は、同質の凝灰質砂岩・砂質頁岩、頁岩および砂岩・泥岩の互層などの下位の地層のものが多い。そして、この巨塊の堆積状態は層理面とは特に関係なく方向性をもたない。これらのことから、橋上砂岩部層の生成は浅海底で火山灰を主とする多量の噴出があり、火道付近を構成する下位の地層を激しく破壊し、あるいは既成の地層を削り取り巨大岩石塊を作り、火山灰と砂との混濁流となり堆積したものと考えられる。

（2）『高楯』付近の地質について

『高楯』付近では、天満神社境内（120m）直下には砂岩の露頭を観察することができる。また弾正淵に流れ込む小川の崖では、凝灰質砂岩が露出し、この中に凝灰質砂岩のコンクリーションが層理面に平行に約20㎝の厚さをもって挟在している。二の丸跡の調査においても耕作土の深さは10～50㎝と浅く、その直下で凝灰質砂岩に達する。『高楯』には、更新世で形成された河岸段丘堆積物も扇状地堆積物も上位にはない。また、『山辺小学校の高台』のボーリング調査においても、数mで岩盤に達することから、現在の『高楯』―『山辺小学校の高台』は西側丘陵を形成している橋上砂岩部層と同じ構成であることがわかる。

（3）地質構造について

山辺町に極く近い丘陵付近に、盆地の西縁を区切るかのように、東西に伸びる平行な大小数本の断層が観察されている。そのうち平野部に最も近い断層は山辺町から寒河江市・河北町を経て、村山市白鳥にいたる大断層と考えられている（地質調査所；仙台20万分の１地質図1987）。この断層は小鶴沢川の上流で確認できる。また、この付近の空撮写真をみると、幾筋かの南北性のリニアメントが観察されるが、最も明瞭なリニアメントは小鶴沢川の川床で観察される断層の位置と一致している。

『高楯』も、これらの断層が生じる過程において丘陵から分離してこの位置に高まりを形成したものと考えられる。

Ⅲ、『高楯』付近の高まりの成因について

『高楯』付近の高まりは後期中新世の本郷層の橋上砂岩部層の堆積物からなること。小鶴沢川扇状地・愛宕沢川扇状地の発達を妨げるだけの高台であったこと。付近は丘陵と平坦地の遷移点で複雑な造構運動をうけ、いくつかの断層をもつ構造帯であることなどを総合して、『高楯』付近の高まりは、更新世の初め山形盆地の原形が形成されるときに造構運動の結果、山形盆地西側の丘陵に分布する橋上砂岩部層の浸食小起伏面が断層運動によって移動したものと考えられる。

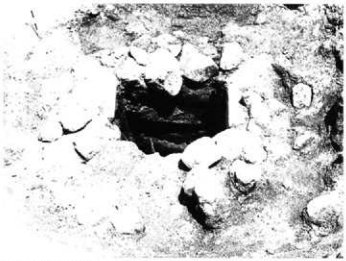
参考資料

仙台地質図（1/20万）地質調査所　　日本地形論　東京大学出版会
日本地質体系　東北地方　朝倉書店　　山辺町地形図（1/5000）山辺町

図版1

小学生を集めての現地説明会風景

発掘調査風景



E区SE163井戸跡

C区SD11溝跡

E区SE163井戸跡を掘り下げた状況

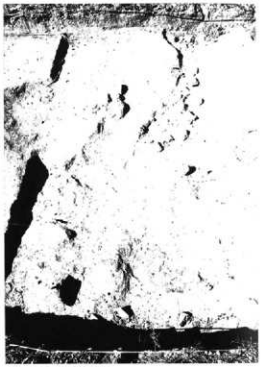
A区SD10薬研堀状況

A区SD10薬研堀状況

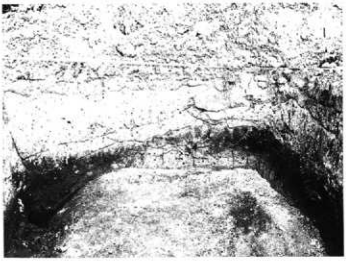
Aトレンチ SD8箱堀の落ち込みライン

C区SD10薬研堀状況

E区SD8堀跡完掘状況



C区SD9水路状遺構



Fトレンチ土層断面

17

2

3

82

81

80

80

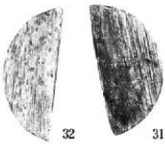
89

90

出土遺物（1）

96

1



32 31

1

4

12

8

13

6

23

20

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	たかだてじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高楯城跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山辺町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	三浦 浩人
編集機関	山辺町教育委員会
所在地	〒990-0301 山形県東村山郡山辺町大字山辺1番地
発刊年月日	平成12年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高楯城跡	山形県東村山郡山辺町大字山辺字北町	6301	346 山辺町遺跡番号 YM2	38° 29′ 69″	140° 26′ 80″	19990608～19990715 2000625～2000710	910㎡	宅地開発 公共事業 (公民館建設)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高楯城跡	城館跡	中世・近世	堀跡 井戸跡 住居跡	青磁 染付 唐津焼 砥石 土師器 須恵器 井戸枠 外	

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第９集

高橋城跡発掘調査報告書

平成12年３月31日

編集　山辺町教育委員会
発行　山辺町教育委員会
〒990-0392　山形県東村山郡山辺町大字山辺１番地
電話　023-664-6033
印刷　藤庄印刷株式会社
〒990-0821　山形市北町1-3-1
電話　023-684-5555